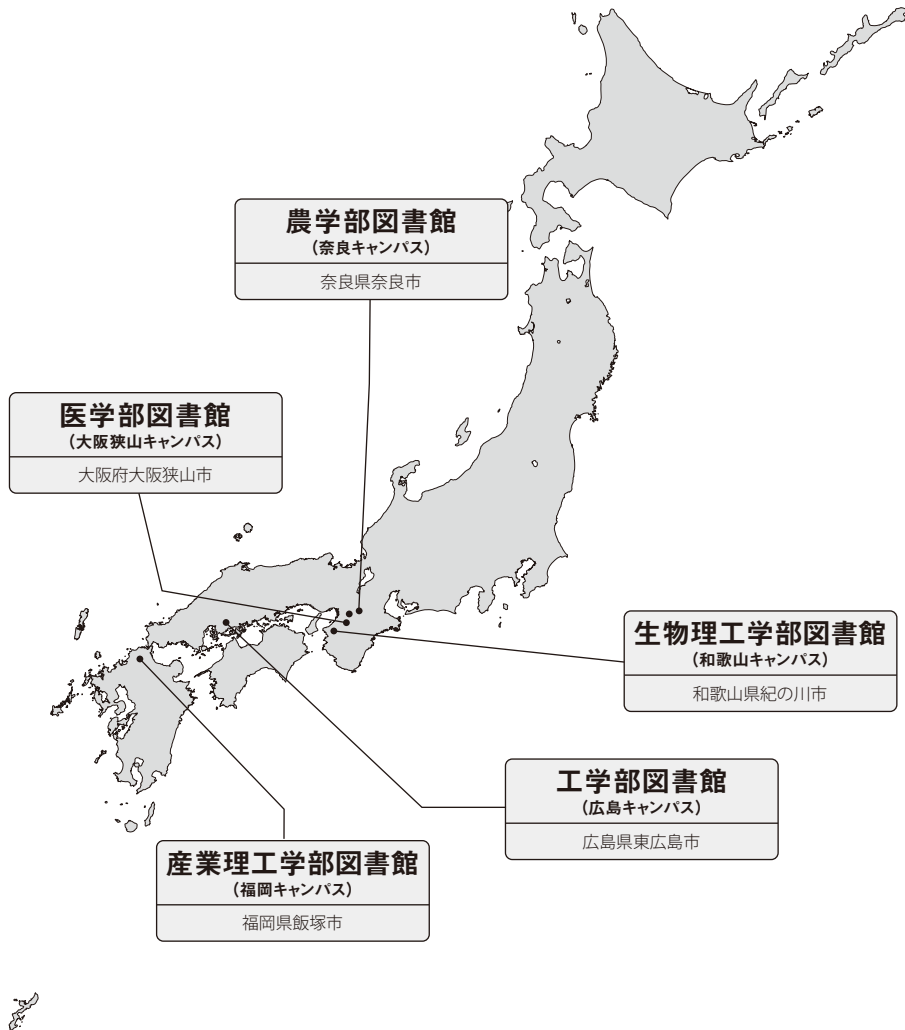


# 各キャンパス図書館めぐり



## マンガが具体化する農学部での学修／サイエンスへの誘い

農学部生物機能科学科 教授 篠原美紀

農学部図書館長を拝命して、私がまず行ったことは図書館にマンガを置くことだった。その経緯と意図についてここで少しご紹介したいと思う。

私が在籍する農学部生物機能科学科は入学試験で数学と理科を選択しなくても受験することができる。つまり、高校で文系クラスにいても受験できることになる。農学部が取り扱う領域はサイエンス領域だが、取り扱う内容はより我々の日々の生活に近いところにあり多岐にわたるため、多様な人材が集まってくれる事を期待してのことである。しかし、一方で1年生の面談でよく耳にするのが（高校の時に選択していなかった）化学や生物の授業内容が難しいという声である。きっと大学での講義内容や研究内容が面白いと思えたらその基礎知識は必要な知識として、受験勉強として勉強するよりははるかに興味をもって楽しく、そして楽に身につくのではないかと思う。しかし中にはそもそも化学や生物など関連分野に興味を持ってない、今からでも転学部したいという学生がいる。積極的な理由での転学部はもちろん悪いとは思わない。しかし、個人的には、せっかく縁あってここに来たのだから、ミスマッチと一言で片付けてしまうのは本当にもったいなく、はじめから「興味がない」と拒絶せずに少しずつでもやってみればそのうち興味が湧いて楽しくなるのにと、とても残念に思うことがある。

私自身は、子供の頃にはあまりマンガを読むタイプではなくどちらかと言えば活字から自分の頭の中で想像を膨らませる方が好きなタイプである。生き物を観察することや身の回りで起きることをなぜだろうと考えることは好きだった。でも、サイエンスに関してはマンガから具体的なイメージを持ったように思う。小学生の時に手塚治虫の「火の鳥」をおそらく最初はテレビアニメでみて、生命っ

て何だろう、それが世代を超えて引き継がれるというのはどういうことなのかと考え始めたような気がする。その後、遺伝に興味を持つようになる。大学で理学部生物学科に進学後、佐々木倫子の「動物のお医者さん」を読んで大学院に進学するとこんな世界なのか…と、同じ低血圧で低体温という共通項も相まって、菱沼女史をカッコいいと思い憧れ、女性が大学院に進学するという私の身の回りには存在しないロールモデルをかなりの確に提供してもらったような気がする。大学院生の時に、良く利用していたラジオアイソトープ実験室の管理室においてあった（持ち主不明の）「MASTER キートン」を電気泳動の待ち時間に読みあさり、学位を取った先に、大学の講師と保険会社の調査員＋アルファの掛け持ちという可能性もあるのかと研究者のキャリアの可能性の幅の広さを教えてもらった。そして、子育てをしながらワールドワイドな仕事（しかもかなりハード）をするという、その後の自分のキャリアを考えるうえでは珠玉のメッセージを頂いた。いずれも友達や先輩に勧められたり、たまたまそこであって手に取ったりしたものばかりで自分で選んで読んだものはない。

農学部図書委員会で各学科選出の委員とのこの件についての議論の中で、農学分野あるいはサイエンスへの興味のきっかけとしてマンガはありですねと、それをきっかけに講義内容や研究内容に興味を持ってくれたら良いのでは？との考えを共有できた。委員の教員はみなさん、似たようなマンガを読んで同じような興味を抱いた…そんな「あおはる」な経験談でひとしきり盛り上がり楽しい会議になった。私は大学の講義の最初の授業時に、「私が15回の授業で提供できるのはほんのきっかけであって、興味を持ったら自分で深く掘り下げて勉強するのが大学の勉強ですよ」と話すことにしている。しかし、それでさえも難しいと拒絶してしまうその前に、マンガを通して自分が知らない世界がここには在って、そこに心引かれる自分が見つかるかもし

れないこと。そしてその先には予想さえしない広い世界と可能性があることに気がつく小さなきっかけを図書館から提供できればよいと思っている。マンガは知らない、見たことのない世界をビジュアル化して直接訴え、それを身構えずに気軽に手に取ることができるツールだと思っている。まずは教員の熱い思いを伝えたくて、教員おすすめのマンガから農学部図書館のコーナーで紹介している。授業の空き時間にでも図書館でふと手に取ったマンガをきっかけにして農学部に興味を持ちました…そんなシチュエーションに想像を膨らませながら。



図：農学部図書館のマンガコーナー  
関連の専門書もステキなポップとともに紹介している。  
良い出会いがありますように…!